Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-02

『源平盛衰記』における建礼門院と四季

吉田，后希

(Citation)
國文論叢,49:18-29

(Issue Date)
2015-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011668

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011668

『源平盛衰記』における建礼門院と四季

吉田　后希

はじめに

『平家物語』において建礼門院の物語は諸本によって異なりを見せる。しかしながら建礼門院が自身の運命を六道に准えて、後白河院に語るという大筋は『平家物語』諸本の凡そ一致するところである。六道という異界[1]を語ることは鎮魂とも深く関わることであり、いわば『平家物語』における建礼門院に課せられた役割の一つということができよう。

さて『源平盛衰記』においては、こうした異界を語る建礼門院には四季記述が頻繁に付随するという特徴がある。たとえば、建礼門院が平家滅亡後に隠居した寂光院では、御腰障子に「四季ノ歌モ書レタリ」とし、以下の四季の和歌四首を挙げる。

古ヘノ奈良ノ都ノ八重桜ケフ九重ヘニ香ヌルカナ
ウチシメリ菖蒲ソカホル杜鵑啼ヤ五月ノ雨ノ夕暮
久堅ノ月ノ桂モ秋ハナヲ紅葉スレハヤ照マサルラン
サシモマタ問レヌ宿ト知ナカラ踏マテソ惜キ庭ノ白雪[2]

（巻第四十八「法皇大原入御」㊥p.478）

また後白河院に対する六道語りにおいて、六道の一、天道にあたる宮中の生活を語る際に以下のような四季記述を用いる。

大内山ノ花ノ春ハ、南殿ノ桜ニ心ヲ澄シ、日ノ長事ヲ忘、清涼殿ノ秋ノ夜ハ雲井ノ月ニ思ヲ懸テ、夜ノ明ナン事ヲ歎、冬ハ右近馬場ニフル雪ヲ、先笑花カト悦、夏ハ木陰涼キ暁ニ初郭公ノ音モウレシ…

（巻第四十八「女院六道（廻物語）」㊥p.497）

紙幅の都合上、例としては僅少であるが、建礼門院と四季は密接な関係を持っているといえよう。特に建礼門院と四季の関係性を考えるにあたって、着目したいのは屋島の合戦記述である。

屋嶋ニハ隙行駒ノ足早ク留ラヌ月日明晩テ春ハ賤カ軒端ニ匂フ梅庭ノ桜モ散ヌレハ夏ニモナリヌ垣根ツ、キノ卯花五月ノ空ノ郭公鳴カトスレハ程モナク秋ノ色ニ移テ稲葉ニ結露深ク野辺ノ虫ノ音ヨハリツ、冷シキ比モ過暮テ冬ノ景気ソ冷シキ麓ノ里ニ時雨シ尾上ハ雪モ積ケリ…

（巻第四十一「平家人々歎」㊥pp.52–53）

こうした表現は『源平盛衰記』巻第十一「経俊入布引滝」に登

場する龍宮城の景観、東に春、南に夏、西に秋、北に冬の景観を配した、いわゆる四方四季の景観記述と近似している。[3] 本論では『源平盛衰記』において異界を語る建礼門院と四季、さらには四方四季との関係性について考察を進めていきたい。

一．建礼門院周辺の四季記述と四方四季との類似性

―巻第十一「経俊入布引滝」を手掛かりとして―

難波六郎経俊という武士が、平重盛の命を受け、布引滝に潜る。そこには四方四季の庭を有する龍宮城が存在しており、長さ八尺にも及ぶ女が機を織っていた。その女の姿を見た難波六郎経俊は直ぐに滝から上がり、滝壺の中の様子を平重盛に語る。しかし、その報告が終わるか終らないかのうちに雷雨が吹き荒れ、雷に打たれて難波六郎経俊は死を迎える。これが『源平盛衰記』の独自記事である巻第十一「経俊入布引滝」の概要である。いわば祟りによって難波六郎経俊は亡くなったといえよう。この龍宮城の四方四季の庭と灌頂巻とを比較しながら見ていくことにしたい。なお、巻第十一「経俊入布引滝」では「東西南北見廻バ、四季ノ景気ゾ面白キ」（㊀p.182-183）という書き出しに続いて、東すなわち春の景観から記述が始まる。

巻第十一「経俊入布引滝」	灌頂巻
	（但し全て巻第四十八に依る）
〈東・春の景観〉	〈南・夏の景観〉
四方ノ山辺モ長閑ニテ、霞ノ衣立渡リ、谷ヨリ出ル鶯モ軒端ノ梅ニ囀、池ノツラヽモ打解テ、岸ノ青柳糸乱。松ニ懸レル藤花、春ノ名残モ惜顔ナリ。…（㊀p.183）	雲井ニ名乗杜鵑、沼ノ石垣水籠テ、菖蒲ミダル、
①彼寂光院ノ景気ヲ御覧シケレハ、古ク造ナセル山水木立、何トナクワサトニハアラネ共、由アル様ナル御堂也。…檐ニハ垣衣茂、庭ニハ葎片敷テ、心ノ儘ニ荒タル籬ハシケキ野辺ヨリモ猶乱氷解ヌル谷川ノ筧ノ水モ絶ゝ也。…露ヲ含メル岸ノ欵冬玉ヲ貫カト誤タル。青葉マシリノ遅桜、梢ノ花モ散残若紫ノ藤花、垣根ノ松ニ懸レルモ、春ノ遺ヲ惜メトヤ、君ノ御幸ヲ待貌也。八重立雲ノ絶間ヨリ、初音ユカシキ山郭公ヲハ、此里人ノミヤ馴テ聞ラント思召知セ給ケリ。岸ノ青柳色深クシ、池水ミトリノ浪ニ立ケレハ、法皇カクソ思召ツヽケサセ給ケル 池水ニ岸ノ青柳散シキテ 浪ノ花コソサカリナリケレ （「法皇大原入御」㊁pp.468-469）	②軒近キ花橘ノ風ナツカシク薫タリケル、折シモ山郭公ノ一声二

五月雨ニ、昔ノ跡ヲ忍ベトヤ、花橘ノ香ソ匂。…
（㊀p.183）

〈西・秋の景観〉

萩女郎花花薄枝指カハス籬ノ内、朝ハ露ニ乱ツヽ、夕ハ風ニヤソヨグラン。梢ニツタフ鶏庭ノ白菊色ソヘテ、窓ノ紅葉ゝ濃薄シ。妻喚鹿ノ声スゴク、虫ノ怨モ絶ゝ也。…
（㊀pp.183-184）

声音信テ、遥ニ聞エケレハ、…御硯ノ蓋ニ、角ソ書スサマセ給ケル

郭公花橘ハナノ香ヲトメテ啼
ハムカシノ人ヤ恋シキ

ト大納言典侍、コレヲ御覧シ、イト、悲ク思召ケレハ

猶モ又昔ヲカケテ忍ヘトヤ古
ニシ軒ニカホルタチ花

（「同御出家」㊅p.458）

③（ⅰ）晩行秋ノサヒシサハ、イト、御心細カラヌト云事ナシ。心ノ儘ニ荒タル籬ハ、繁野辺ヨリモ露ケクテ、折知カホニイツシカ虫ノ音声々ニ怨モ哀也。
（「大臣父子従鎌倉上洛」㊅p.460）

（ⅱ）嵐列シ木葉猥カハシ。鹿音時ゝ音信テ、虫ノ怨モ絶ゝ弱レリ。秋ノ悲秋ノ哀ヲサヘ、取集タル御心スコサニ、古歌ヲ思召出ツヽ、

奥山ニ紅葉フミ分啼鹿ノ
コエ聞時ソ秋ハ悲シキ

口スサマセ給ケルニ付テモ、浦伝島伝セシカ共、サスカ是程ハナカリシ物ヲト思召テ、責ノ御事ト覚テ、哀ナル。…妻恋鹿ノ籬ノ中ヲソ通ケル。…
（「大臣父子従鎌倉上洛」㊅pp.462-464）

〈北・冬の景観〉

木ゝノ梢モ禿ニテ、焼野ノ薄霜枯ヌ。降積雪ノ深ケレハ言問道モ埋レヌ。
（㊀p.184）

④サシモマタ問レヌ宿ト知ナカラフマテソ惜キ庭ノ白雪
（「法皇大原入御」㊅p.478）

灌頂巻の四季記述を抄出した。①は春の景観についての記述であり、大原に御幸した後白河院の寂光院に対する感慨である。「寂光院ノ景気ヲ御覧シケレハ」と、巻第十一「経俊入布引滝」と類似する書き出しから始まり、松・藤花といった春の景物を以て寂光院の様子を記述する。しかし、後白河院の大原御幸は作中では「卯月未ノ事」である。したがって夏あるいは夏から秋の景物を以て寂光院の景観を語るべきであろう。ただし、①の記述は全て春の景物による表現ではなく、秋の景物も織り交ぜられている。たとえば、「心ノ儘ニ荒タル籬ハシケキ野辺ヨリモ…」は明

らかに夏から秋にかけての景物である。それを裏付けるのが遡る巻第四十五「建礼門院吉田坐」である。この章段でも同じ表現が使用されている。六月半ばを過ぎた頃に吉田に入御した建礼門院が「心ノ儘ニ荒タル籬ハ滋野辺ヨリモ猶露繁ク、折知カホニイツシカ虫ノ声ニ怨モ我身ノ上トソ思召」（六p.319）と述懐し、夏から秋の景観を彩るものとして認識され、「心ノ儘ニ荒タル籬」等が用いられていることがうかがえる。季節が異なる景物の混合の理由について明確な答えは持たないが、興味深い点として記しておきたい。

続いて②であるが、この記述直前に「五月ノ短夜」とあり、この和歌が詠みかわされたのが夏であることを示している。「花橘ノ香」や「昔ノ跡ヲ忍ヘトヤ」といった表現が共通して見られる。遡る巻第四十四「女院出家」においても、建礼門院と大納言典侍が全く同じ和歌を詠みかわしており、これも①で見た「心ノ儘ニ荒タル籬…」同様、建礼門院の四季記述において繰り返し使用される表現である。なお、繰り返し使用される近似表現の例として、巻第十六「菖蒲前」等でも巻第十一「経俊入布引滝」の夏の景観と類似した表現が見られる。[4] ③（i）は「晩行秋」に吉田の景観を記述したものとし、（ii）は「十月末ノ頃」に寂光院の景観を記述したものとしており、ともに秋から冬にかけての場面とされる。「虫ノ怨モ絶ヘ弱レリ」、「妻恋鹿」といった記述が共通して見られる。④の冬に関する景観記述は極めて少ない。抄出した寂光院の御腰障子に書かれた四季の和歌四首に見出せる他は、「余寒猶冽シ去年ノ白雪消遣ス。谷ノツラ、モ打解ネハ…」（巻第四十八「法皇大原入御」六pp.465-466）と寂光院の冬を端的に述べるだけに留まる。

以上より灌頂巻に巻第十一「経俊入布引滝」の四方四季の詞章に近似した表現が見られることが指摘できる。特に寂光院の景観記述の「寂光院ノ景気ヲ御覧シケレハ」という書き出しは、「東西南北見廻バ、四季ノ景気ゾ面白キ」という巻第十一「経俊入布引滝」における四方四季の詞章の始まりを彷彿とさせ、この四方四季の詞章を意識しているかのように思わせる。確かに東に春、南に夏、西に秋、北に冬といった、四季と方角を一致あるいは意識させるような記述はなく、建礼門院周辺の四季記述が必ずしも巻第十一「経俊入布引滝」の四方四季の詞章に依るものと断ずることはできない。しかし、巻第十六「菖蒲前」等『源平盛衰記』随所に巻第十一「経俊入布引滝」の四方四季の詞章に類似する表現が見られ、特に建礼門院周辺における四季の景観記述にその特徴が顕著であることから、灌頂巻を中心として『源平盛衰記』の四季記述と四方四季の詞章に相関関係があることは指摘できよう。続いてこの四方四季の表現の遡源と意味について見ていく。

二．中世にいたるまでの四方四季
―四方四季の詞章の登場以前―

四方四季の表現の古例は『宇津保物語』とされており、四方四季の景観を有する邸が西方浄土に准えられるなど、古くは理想郷を彩る景観として機能していた。

（i）『宇津保物語』における四方四季の景物

『宇津保物語』に、紀伊国の神南備種松によって造営された吹

上の宮という大殿が登場する。その吹上の宮の内部の様子が四方四季の景観とされる。以下に抄出する。

〈全体像〉

吹上の浜のわたりに、広くおもしろき所を選び求めて、金銀瑠璃の大殿を造り磨き、四面八町の内に、三重の垣をし、三つの陣を据ゑたり。宮の内、瑠璃を敷き、おとと十、廊、楼なんどして、紫檀、蘇芳、黒柿、唐桃などいふ木どもを、材木として、金銀、瑠璃、車渠、瑪瑙の大殿を造り重ねて、四面めぐりて、東の陣の外には春の山、南の陣の外には夏の陰、西の陣の外には秋の林、北には松の林、面をめぐりて植ゑたる草木、ただの姿せず。咲き出づる花の色、木の葉、此の世の香に似ず、旃檀、優曇、交じらぬばかりなり。孔雀、鸚鵡の鳥、遊ばぬばかりなり。（「吹上」上pp.377-378）

また同巻ではさらに「いはゆる西方浄土に生まれたるやうになむ。四面八町の所を、金銀、瑠璃、車渠、瑪瑙して造り磨き、…」（p.433）とあり、四方四季の景観を持つ吹上の宮を「西方浄土」という理想郷に準える。『往生要集』に次のような記述がある。

第四に、五妙境界の楽とは、四十八願もて浄土を荘厳したまへば、一切の万物、美を窮め妙を極めたり。…黄金の池の底には白銀の沙あり、白銀の池の底には黄金の沙あり、水精の池の底には瑠璃の沙あり、瑠璃の池の底には水精の沙あり。珊瑚・琥珀・車磲・瑪瑙・白玉・紫金も亦またかくの如し。（巻上・大文第二「欣求浄土」pp.57-58）

「金銀、瑠璃、車渠、瑪瑙」が浄土を彩るものとして理解されていたことがうかがえる。『宇津保物語』における四方四季の景観もこれと同じ概念を有しているのであろう。

〈東・春の景観〉

①宮より東は海なり。その海づらに、岸に沿ひて大いなる松に藤かかりて、二十町ばかり並み立ちたり。それに次ぎて、樺桜一並並み立ちたり。それに沿ひて紅梅並み立ちたり。それに沿ひて、躑躅の木ども北に並み立ちて、春の色を尽くして並みたり。

②仲忠の侍従、花園の胡蝶に書きて、

花園に朝夕分かずゐる蝶を松の林はねたく見るらむ

少将、林の鶯に書きつく。

常磐なる林に移る鶯をとぐらの花もつらく聞くらむ

あるじの君、水の下の魚に、

底清く流るる水に住む魚のたまれる沼をいかが見るらむ

良佐、山の鳥どもに、

葦繁る島より巣立つ鳥どもの花の林に遊ぶ春かな

（「吹上」上pp.381-382）

③東面、浜のほとり、花の林二十町ばかりなり。花の御垣のもとまで並み立ち、満つ潮は御垣のもとまで満ち、干る潮は花の林の東を限れり。潮満てば、花の木は海に立てるごと見ゆ。砂子麗し。木の根しるからず。色々の子貝ども敷けるごとあり。（「吹上」上p.397）

④あるじの君、

春風の漕ぎ出づる船に散り積めば籬の花をよそに見るかな

（「吹上」上p.400）

春の記述は極めて多い。①では、吹上の宮より東は海になっており、その海辺に沿って藤のかかった大きな松が二十町ばかり立ち並んで咲き誇っている様を述べる。またそれに続いて、樺桜が一列に立ち並び、それに沿って紅梅もずらりと立ち並んでいる。②は吹上の宮の主、神南備種松が主催した三月三日の節句の饗応である。都からの客人を盛大に饗応し、酒宴が催される。その場で仲忠の侍従が「花園の胡蝶」を題として歌を詠む。それに続き、少将らが和歌を詠む場面である。鶯など種々の景物を以て、吹上の宮の春の景観の美しさを褒め称える。③は春の景観が広がる吹上の宮の東面についての記事である。海岸沿いに花の林が二十町ばかり立ち並び、浜の砂子や色とりどりの貝が見事なものであるとする。④は吹上の宮の東に面した浜での花見の饗応で詠まれた和歌である。花を中心とした景物を以て、吹上の宮の春の景観の美しさを褒め称える。

〈南・夏の景観〉

南面、大きなる野辺のほとり、松の林二十町ばかり、丈等しく姿同じやうなる。野清く広し。鹿、雉子、数知らずあり。

（「吹上」上pp.396-397）

〈西・秋の景観〉

秋の紅葉、西面、大いなる河づらに、からのごと波を染め、色を尽くし、町を定めて植ゑ渡し、北、南、時を分けつつ同じやうにしたり。

（「吹上」上p.382）

宮より西、大きなる川のほとり、二十町ばかり、紅葉の林の丈等しう、数同じ。

（「吹上」上p.397）

〈北・冬の景観〉

宮より北面、大きなる山のほとり、山より下まで常磐の木、色を尽くしたり。町のほど、木の数、南と等し。

（「吹上」上p.397）

夏の景観を有する吹上の宮の南面は広々とした野原が広がり、その付近に松の林が二十町ほど広がっているという。春の景観に比べて、夏の景観の記述は至って簡素なものである。吹上の宮より西は、大きな川岸に二十町ほどに紅葉の林があり、秋の景観を有する西では、紅葉の木立と川が目を引くことが記される。吹上の宮より北は、大きな山があり、常緑の木があって緑色が濃い。町の様子、木の数は南と同じであるとし、南と同じ規模の木立が広がりを見せる。

『宇津保物語』吹上・上では、東に春の景観、南に夏の景観、西に秋の景観、北に冬の景観を配し、春は、桜花、春雨、鶯、紅梅、躑躅など、夏は松、鹿、秋は紅葉、冬は常緑の木を以て、それぞれの景観を賛美する。ただし春の記述が極端に多く、秋や冬の景観記述は極端に少ないという偏りも指摘できよう。

(ii)『源氏物語』における四方四季の景物

『源氏物語』において四方四季の景観を有するのは六条院である。四方四季の町を有する六条院は『宇津保物語』の吹上の宮の四方四季の構造の系譜を引いており、神仙や常世の観念が内在する理想郷であったとされている。『源氏物語』初音巻では、六条院の春の町に関してではあるが「生ける仏の御国」と評す。『宇津保物語』同様、浄土の如き理想郷としての六条院を確認したと

ころで『源氏物語』六条院における四方四季の景物を見ていきたい。六条院の四方四季の景観記述に関して、以下、巻ごとに抄出していくものとする。

南の東は、山高く、春の花の木、数を尽くして植ゑ、池のさまおもしろくすぐれて、御前近き前栽、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅などやうの春のもてあそびをわざとは植ゑで、秋の前栽をばむらむらほのかにまぜたり。中宮の御町をば、もとの山に、紅葉の色濃かるべき植木どもを植ゑ、泉の水遠くすまし、遣水の音まさるべき巌たて加へ、滝落として、秋の野を遥かに作りたる、そのころにあひて、盛りに咲き乱れたり。嵯峨の大堰のわたりの野山むとくにけおされたる秋なり。北の東は涼しげなる泉ありて、夏の蔭によれり。前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深くおもしろく、山里めきて、卯花の垣根ことさらにしわたして、昔おぼゆる花橘、撫子、薔薇、くたになどやうの花のくさぐさを植ゑて、春秋の木草、そのなかにうちまぜたり。東面は、分けて馬場殿つくり、埒結ひて、五月の御遊び所にて、水のほとりに菖蒲植ゑしげらせて、むかひに御厩して、世になき上馬どもをととのへ立てさせたまへり。西の町は、北面築きわけて、御倉町なり。隔ての垣に松の木しげく、雪をもてあそばんたよりによせたり。冬のはじめの朝霜むすぶべき菊の籬、我は顔なる柞原、をさをさ名も知らぬ深山木どもの、木深きなどを移し植ゑたり。　（「少女」pp.78-80）

『源氏物語』の中で少女巻が六条院の四方四季の概要について最も端的にまとめている。東南の町は、山を高く築いて、池の風情は格別、前栽には、五葉の松、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅などの春の草木だけでなく、秋の草木の植え込みも混ぜ込まれている。西南の町では、築山に紅葉の色が鮮やかになるような木々を植え、遣水の音が冴えわたるように工夫を凝らし、秋の野を広々と造る。北東の町は夏の木陰を主として造り、卯の花の垣根をめぐらし、花橘や撫子、薔薇などを植え、春と秋の木草を織り交ぜる。西北の町には、松の木が多く茂り、雪景色を鑑賞するのに都合がよい。菊の籬や深山木などが植えてある。『宇津保物語』に比して四季の景物記述はより具体的になったといえよう。

春の御殿の御前、とりわきて、梅の香も御簾の内の匂ひに吹き紛ひ、生ける仏の御国とおぼゆ。　（「初音」p.143）

春の御前のありさま、常よりことに尽くしてにほふ花の色、鳥の声、他の里には、まだ古りぬにやとめづらしう見え聞こゆ。…こなたかなた霞みあひたる梢ども、錦を引きわたせるに、御前の方ははるばると見やられて、色を増したる柳枝を垂れたる、花もえもいはぬ匂ひを散らしたり。他所には盛り過ぎたる桜も、今盛りにほほ笑み、廊を繞れる藤の色もこまやかにひらけゆきにけり。まして池の水に影をうつしたる山吹、岸よりこぼれていみじき盛りなり。水鳥どもの、つがひを離れず遊びつつ、細き枝どもをくひて飛びちがふ、鴛鴦の波の綾に文をまじへたるなど、物の絵様にも描き取らまほしきに、…　（「胡蝶」pp.165-167）

いずれも春の町に関する景観記述である。初音巻では梅の香が風に匂い、この世の極楽浄土と思われるとし、胡蝶巻では船楽を記す。そこでの春の町の様子は桜や山吹、藤などが今を盛りと咲

き誇っている。

御前に、乱れがはしき前栽なども植ゑさせたまはず、撫子の色をととのへたる、唐の、大和の、籬いとなつかしく結ひなして、咲き乱れたる夕映え、いみじく見ゆ。

（「常夏」p.228）

東北の町の西の対の様子である。庭前には撫子が美しく咲き乱れている。斯くの如くして『宇津保物語』や『源氏物語』等の流れの中で四方四季の概念、景物表現は育まれてきた。

三．中世における四方四季

―異界を彩る四方四季―

こうした『源氏物語』の六条院の四方四季の景物と比較すると、「昔おぼゆる花橘」や薔薇など、『源平盛衰記』の四方四季の景物と共通性が見られる。しかし、その一方で『源氏物語』の段階では四季と方角が完全に一致していないなど四方四季の表現の固定化にはいまだ至っておらず、『源平盛衰記』で見られたような四方四季の詞章が見られるわけではない。この点について市古貞次氏は以下のように述べる。

われわれは、中世に至って一つの理想郷の型を完成したとみられないこともない。…理想郷にしばしば描かれた四季の景観に注意したいと思ふのである。…このやうに四方に四季を配したことは、あながち中世に始まったことではない。「宇津保物語」吹上巻に描かれている神南備の種松の邸の四面は、東の陣の外に春の山、南の陣の外に夏のかげ、西には秋の林、北には松の林といふ風になってゐた。…しかし上述中世の諸作の詞章に類似してゐて、最もはやく制作せられたものとしては、「源平盛衰記」巻十一の難波六郎経俊が見た龍宮の描寫をあげなければならぬであらう。[5]

『宇津保物語』を遡源とし、[6]『源氏物語』においてやや発展した理想郷としての四方四季の表現は、その段階においては、『源平盛衰記』巻第十一「経俊入布引滝」が極めて饒舌な表現を以て四方四季を語っているのに比すれば非常に簡素な表現であった。市古氏は中世に至って『源平盛衰記』の四方四季の詞章が最もはやく制作された先駆けと指摘されるが、この『源平盛衰記』の四方四季の詞章は諸作品に影響を与えていることが確認できる。すなわち『源平盛衰記』の四方四季の詞章の登場により、諸作品に四方四季の詞章が展開されていく。こうした詞章の登場・展開こそ、中世における四方四季の特徴の一点目と考える。たとえば、『不老不死』（室町末期成立）はその影響を受けたと思われる一例である。紙幅の都合上、春・夏の景観のみ抄出するが、他の景観においても類似表現が見られる。

巻第十一「経俊入布引滝」	『不老不死』
庭ニハ金銀ノ沙ヲ蒔、池ニハ瑠璃ノソリ橋、溝ニハ琥珀ノ一橋ヲ渡シ、馬脳ノ立石珊瑚ノ礎真珠ノ立砂、四面ヲ荘レリ。（㈡p.184） 東ハ春ノ心地也。四方ノ山辺モ	…庭には金銀の砂をしき、四季の有様、まのまへ也 東は、春の景色にて、軒はにちかき、梅かえの、花はこそふる、白雪の、きえぬ色かと、あやしまれ、にほひにめてゝ、

長閑ニテ、霞ノ衣立渡リ、谷ヨリ出ル鶯モ軒端ノ梅ニ囀、池ノツラ、モ打解テ、岸ノ青柳糸乱。松ニ懸レル藤花、春ノ名残モ惜顔ナリ。　（①p.183）

南ハ夏ノ心地也。立石遣水底浄、汀ニ生ル杜若、階ノ本ノ薔薇モ折知ガホニ開ケタリ。垣根ニ咲ル卯花、雲井ニ名乗杜鵑、沼ノ石垣水籠テ、菖蒲ミダル、五月雨ニ、昔ノ跡ヲ忍ベトヤ、花橘ノ香ソ匂。潭辺ニ乱飛螢、何トテ身ヲバ焦スラン。梢ニ高ク鳴蟬モ、熱サニ堪ヌ思カハ…　（①p.183）

鶯や、たにのとほそを、はなれきて、こゑめつらかに鳴ぬらん

さむきなこりの、うすゆきに、きぬをかさねて、きさらきや、山は霞の、たな引て、岸の青やき、めもはるに、ほころひそむる桜花、さかりをそしと、わひぬらん、松にかゝれる、藤の花、春のなこりも、おしけ也

みなみに夏の、時をえて、たて石、やり水、そこ清く、みきはにおふる、かきつはた、いろもひとしほ、こむらさきの、花の匂ひそ、いとゆかしき、御はしのもとの、さうひまて、おりしりかほに、うるはしや、

かきねにさける、卯のはなは、月か雪かと、白たへに、明ほのしるき、よこ雲の、うちより名のる、ほとゝきす、ぬまのいはかき、水こめて、あやめ乱るゝ、さみたれに、昔の跡を、しのへとや

花橘の、香そきこゆる、さはへにみたれ、とふ螢、なれも思ひのあるにこそ、身をこかすらん、ゆふまくれ、木すゑ涼しき、蟬のこゑ、もぬけて行も、心有　（pp.574-575）

『不老不死』は、不老不死の薬にまつわる神仙たちの逸話集であり、医術に長けた孫子邈が、足を痛めた阿香龍王を治療して、阿香龍王の住処である「りうくうせかい」（龍宮）を訪問する場面である。『不老不死』における四方四季の詞章は『源平盛衰記』の詞章と同文表現を持っている最たるものであり、『源平盛衰記』との相関関係が強いことを指摘できる。[7]『源平盛衰記』自体も神仙思想を有しており、灌頂巻もその例外ではない。[8]その影響故か、殊に『源平盛衰記』の詞章はこうした神仙思想の強い作品で多々引用されることが多い。他にも『すゑひろ物語』（江戸前期成立か）が例として挙げられる。『すゑひろ物語』では仙境にある「園」が四方四季の景観をもつとされる。

続いて四方四季の意味するところを考えていきたい。『宇津保物語』の吹上の宮や『源氏物語』の六条院が、極楽浄土に類する理想郷であり、それを四方四季の景観が彩っていることは見てきた通りである。しかしながら、『源平盛衰記』はそれらと同じ理想郷といえるであろうか。確かに『源平盛衰記』の龍宮城は最初

こそ極楽浄土のような理想郷を思わせる。しかし最終的には「黒雲引覆雷鳴アガリテ大雨降、イナビカリシテ目モ開キガタ」（二p.185）い状態を呼ぶ龍宮城へと反転し、さらには龍宮城を訪れた経俊が祟りによって死を迎えるなど、『宇津保物語』などの理想郷とはかけ離れた存在に四方四季が登場する。こうした事例は他にも見られる。例えば『田村の草子』（室町後期成立）では伊勢国鈴鹿山の鬼神、大獄丸退治の宣旨を受けた俊宗が、大獄丸の住処を訪れる場面に四方四季が登場する。ここで四方四季の景観をもつのは大獄丸の住処、鬼神らの住まう場所である。他にも南北朝期から室町期の時期に描かれた絵巻に四方四季を有するものが登場する。たとえば十四世紀前半に描かれた『浦嶋明神縁起絵巻』に登場する龍宮城、さらに一六世紀前半に描かれた『酒呑童子絵巻』に登場する酒呑童子の庭が、四方四季の景観を持つとされている。

御伽草子など南北朝期から室町期にかけての作品には、神仙思想を内包する浄土の如き理想郷のみならず、鬼神の住まう場所や訪れた者が死を迎える龍宮城にまで四方四季の景観が登場する。すなわち、龍や鬼、仙人など住まうものは異なれども、現実世界とは異なる「異界」こそ四方四季の景観をもっていることがうかがい知れる。小松和彦氏は「異界は、時間軸上に現れる異界と、空間軸上に現れる異界とがある。たとえば、前者は、夜の世界としての異界や死後の世界としての異界、後者は、天上世界や山中世界、水中（海中）世界、地下世界などが典型であるが、この二つの異界はしばしば重なってイメージされる。死者の魂は山にこもるとか、死後に赴く極楽や地獄は、西方や地下にあるとも考えられていたことに、そのことは示されている。」と指摘し、こうした異界観を「多様で重層的構造を帯びた異界観」と評される。[9] また小峯和明氏は「異界の造型として竜宮も冥界もほとんど同一」[10]とされる。小松氏、小峯氏の異界観に随うならば龍宮城、仙境、鬼の住まう場所、冥界、すなわち現実世界と切り離された存在全てが異界であり、その異界には理想郷も含まれる。異界の共通項が四方四季の景観を有することにあり、異界全般を示すようになった四方四季の広義性が、中世における四方四季の特徴の二点目といえよう。

ここで『源平盛衰記』の建礼門院に話を戻す。四方四季の景観は、『源平盛衰記』あるいは御伽草子等同時代に作られた作品においては龍宮城や仙境、鬼の住まう場所などの異界の景観を記述する際に用いられるものであった。従来の理想郷のみに限定されず、それとはかけ離れた概念を持つ龍宮城なども含め、現実世界とは異なる異界全般を彩るものとしてより広範な意味を持つようになったと指摘できる。冒頭で触れたように建礼門院は六道という異界を語る存在である。そういった異界との結びつきの深い建礼門院であるからこそ、四方四季とは異界を彩る存在であるという中世独自の理解が影響し、四方四季の詞章を踏まえたような四季記述が建礼門院周辺に散見されるのではないかと考える次第である。

おわりに

四方四季の表現の表出は『宇津保物語』に端を発する。常世や神仙の観念が内包され、理想郷を彩るものとして理解され、『源

氏物語』にもその概念は引き継がれた。加えて、『源氏物語』ではその四季それぞれの具体的な景物記述が定まりつつあった。しかしながら、『宇津保物語』では具体的な景物記述に乏しく、『源氏物語』においても具体的な四季の景物記述の萌芽が見られるものの、四季と方角が完全に一致しないなど、四方四季の表現は完全に固定化したものではなかった。

『源平盛衰記』の時代に至ると、『源氏物語』に着想を得、四方四季表現の詞章が登場し、さらにそれは御伽草子、特に仙境などが登場し、神仙思想が強い『不老不死』などに受け継がれ、四方四季の表現には凡そ定まった形式が見られるようになった。しかしながら、四方四季の意味するものも変化した。『源平盛衰記』では、訪れた者が死を迎える龍宮城の庭を彩り、御伽草子においても、鬼神の住まう場所や鬼の国を彩るなど、必ずしも従来の『宇津保物語』等に見られるような浄土の如き理想郷のみを彩るものとして四方四季は存在していない。つまり『源平盛衰記』や御伽草子の時代には現世とはかけ離れたもの、すなわち理想郷だけでなく、理想郷を含めた様々な異界全般を彩るものとして四方四季は機能し始めたと指摘できよう。

そして、こうした四方四季の概念は建礼門院とも関わることを指摘した。『源平盛衰記』の四季記述には巻第十一「経俊入布引滝」に登場する四方四季の詞章と類似した表現が散見され、特に灌頂巻においてはその特徴が顕著である。その理由として、建礼門院は地獄を中心に六道という異界を語る存在であり、異界と深く結びつくゆえに、異界を彩る存在である四方四季を意識した記述が付随したのではないかと考える。四方四季に内在する神仙思想と建礼門院との関係についてのさらなる考察を課題として、ひとまず結びとしたい。

注

（1）『閑居友』では建礼門院の庵室に地獄絵が置かれていたと記す。また『源平盛衰記』は建礼門院の御戒の師に長楽寺の印西上人が選ばれたとするが、『今昔物語集』ではこの長楽寺が地獄絵で有名な寺であったと記す。建礼門院と地獄との結びつきは特に強い。

（2）本稿において、引用文中の旧字に関しては便宜上当用漢字に改め、適宜句読点を補った。

（3）櫻井陽子「覚一本平家物語の表現形成―灌頂巻『大原御幸』の自然描写を中心に―」（『中世文学』第三十五号　一九九〇年六月）において、既に覚一本『平家物語』の四季空間の特徴並びに四方四季との関係性などについては詳細なご指摘がある。

（4）「五月雨ニ沼ノ石垣水コエテ何カアヤメ引ゾハヅラフ」
（巻第十六「菖蒲前」㈢p.504）
「昔ノ遺ヲ忍ヘトヤ千代ノ形見ニ引植サセ給ケル老木ノ桜計コソ折知カホニ咲ニケレ」（巻第四十「三位入道熊野詣」㈤p.584）

（5）市古貞次『中世小説の研究』（東京大学出版会　一九五五年）

（6）四方四季の潮流などについては、徳田和夫『お伽草子研究』（三弥井書店　一九八八年）に引教を得た。

（7）『源平盛衰記』の成立は凡そ十四世紀前半と類推されている。四方四季の景観を登場させる作品が同じくこの時期以降に集中して登場することとどのように関係するかについて明確な答えは持たないが、室町から江戸初期成立の那智山宮曼荼羅（熊野那智大社蔵）などの寺社縁起絵巻においても影響関係が見られる。御伽草

子諸作品との同時代性についての考察は『源平盛衰記』成立・伝播の研究の一翼を担うものと考え、今後の課題としたい。

(8)「蓬萊方丈瀛州ノ三ノ神仙ノ嶋ナラハ不死ノ薬モ取ナマシ」(巻第七「俊寛成経等移鬼界島」㈠pp.460-461)、「是ヤコノ費長房ガ入ケル壺公ガ壺ノ内、浦嶋ガ子ガ遊ケン名越ノ仙室ナルラント」(巻第十一「経俊入布引滝」㈠p.184)、「蓬萊山ニハ千歳経ル、万歳千秋重レリ、松ノ枝ニハ鶴巣食巌ノ上ニハ亀遊」(巻第十七「祇王祇女」㈢p.11)、「不死ノ薬ヲ採ントテ、方士ヲ使ニ遣シ蓬萊ヲ求シニ」(巻第二十八「経正竹生島詣仙童琵琶」㈣p.240)、「東方朔西王母カ一万歳ノ命、皆昔語ニ名ヲ伝ヘ」(巻第四十「維盛出家」㈤p.561)、「長生不老術ヲ求テ、不衰事ヲ願蓬萊不死ノ薬ヲ尋テ、久保ン事ヲ思キ」(巻第四十八「女院六道(廻物語)」㈥p.497)など神仙思想に影響を受けた表現が多数見られる。

(9) 小松和彦「『異界』と絵巻」(小松和彦監修『別冊太陽　妖怪絵巻』平凡社　二〇一〇年)

(10) 小峯和明「竜宮と冥界」(小松和彦監修『別冊太陽　妖怪絵巻』平凡社　二〇一〇年)

【使用テキスト】

宇津保物語＝中野幸一校注『うつほ物語㈠』(小学館　一九九九年)、往生要集＝石田瑞磨校注『源信』(岩波書店　一九七〇年)、源氏物語＝阿部秋生ら校注『源氏物語』(小学館　一九九六年)、源平盛衰記＝渥美かをる解説『源平盛衰記　慶長古活字版　㈠-㈥』(勉誠社　一九七八年)、すゑひろ物語＝横山重ら編『室町時代物語大成　第七巻』(角川書店　一九七九年)、不老不死＝横山重ら編『室町時代物語大成　第十一巻』(角川書店　一九八三年)

(よしだ　みき／神戸大学大学院生)